氷川神社社報

第 43 号
発行
石神井氷川神社
練馬区石神井台 1-18-24
宮司 奥野 雅司
電話 03(3997)6032

翁童の景色

宮司　奥野　雅司

私事で恐縮ですが、このたび白内障の手術を受けました。右目を先に行ない、一週間置いて左目の手術を受けるのです。今この原稿は一週間の術間期に書いています。手術を受けた右目はびっくりするくらい光の透明度が高く、紫外線をやや強く景色が鮮やかに感じられます。それに較べると左目の景色は、やや黄色味がかっている事に気が付きました。

今まで当たり前と思って見てきた世界が実は六十年余の年月を経て気付かぬうちに黄化していた訳です。六十一歳の左目と手術を受けて十代に還った右目が同居している、何とも不思議な気分を味わっているところです。「見え方」の黄化は細胞の劣化には違いありません。反対に歳を経て、経験を積んだ物の「見方」は少なからず鍛えられて熟練していると信じたいものです。

十代の視野を得て、また新しい物事の見方を模索してみたいと思っております。

そもそも満六十歳の還暦という歳には暦の六十干支が全て巡って、生まれ変わるという意味があります。神事芸能に於いても純真無垢な七歳以下の児童でないと奉仕出来ない所役があったり、還暦を過ぎた翁の領域に達した者でないと伝授されない秘伝があります。例えば能楽の『鷺』は還暦を過ぎた熟達した能楽師か、元服前の児童にしか舞う事を許されません。白鷺の無垢な姿が表せないからであります。

還暦を過ぎた「翁」と世間の穢れに未だ触れていない「童」を比較して民俗的に論考を加えた『翁童論』という本があります。（翁童“おうどう”と読み、四冊の関連著書あり）著者は神道学者の鎌田東二教授。不肖私も学生時代薫陶を受けた事があります。焼酎を好み、岩笛や法螺貝を吹き、日本各地を巡り歩いた快男児でありました。そんな先生が去年帰幽されたのは寂しい限りです。ただこの原稿を書いている今日、五月三十日が御命日である事に奇しき縁を感じています。

酷暑と表現される日々が続く夏が迫って参りました。油断せずに過ごしたいものです。皆様のご健勝を心からお祈り申し上げております。

三宝寺池の沼沢植物群落（通称浮島）〔天然記念物〕

節気と候

節気

節気は季節の節目を示すもので二十四に分けられており、春分の日と秋分の日を起点にそれぞれ十二等分されています。本件は社報十五号に掲載いたしましたので詳細はそちらに譲りますが、春分点と秋分点が最も重要となります。

地球は太陽の周りを一年かけて廻りますが、地球上から太陽の軌道を観察したものを黄道と呼び、地球の赤道と交わる点を春分・秋分としています。

節気は二十四あって、四季を更に細分化したものでより細かく四季の移ろいを感じることが出来ます。春分と秋分は祝日になっているので皆さんご存じですが、最近はテレビや新聞でも季節の変わり目には立春・立夏・立秋・立冬をよく耳にします。また、夏至や冬至・啓蟄なども広く認知されているようです。しかしながら殆どの場合、暦のうえでの季節と実際に体感している“季節”があまりに乖離している昨今の状況を揶揄するような、諦めにも似た使い方が多く見られるようです。

冬	秋	夏	春
立冬	**立秋**	**立夏**	**立春**
小雪	処暑	小満	雨水
大雪	白露	芒種	**啓蟄**
冬至	**秋分**	**夏至**	**春分**
小寒	寒露	小暑	清明
大寒	霜降	**大暑**	穀雨

二十四節気

夏至や冬至のように、昼と夜の長さが特徴的な日はその限りではありませんが、暦で示されているような昔の四季とは違って、地球温暖化が進んだことで季節の分かれ目が曖昧になりつつあることは嘆かわしい限りです。

七十二候

実は、暦には節気よりも更に細かく分けられた「候」があります。候は、各季節ごとの節気を更に三等分して十八にし、全部で七十二に分けたものです。一年を通すと、凡そ十五日ごとに変わる節気に対して、候は五日ごとに変わることになります。

「候」という漢字自体は、「待つ」「うかがう」「流れを見る」という意味で、中国では季節の観察などに関連して使われる漢字でした。

日本に伝わってからは、季節や時間の動き、流れなどを示す気候（毎年繰り返される気温や降水量などの変化）や時候（気候や季節の移り変わり）のような使われ方をしています。

また、平安以降日本の古文では手紙などで使われており、「そうろう」と読み丁寧な表現や敬語の括りとして使われていました。

現在では手紙などの書き始めに、季節の挨拶として「春分の候　桜の開花が待ち遠しい季節となりました」「立夏の候　晴れ渡る青空が広がる季節となりました」のように季節の移ろいを喜び合い、相手への気遣いや礼儀を表す書き出しとして使われます。

七十二候が最初に示されたのは、中国の春秋時代の黄河下流にあった中国華北地方で書かれた『呂氏春秋』という文献が最初と言われています。この文献を編纂したのは呂不韋（りょふい）という人物で、紀元前二三九年頃に全二十六巻に亘って儒家、道家などの学説を書き綴っています。呂不韋は皇帝の側近で、丞相という地位にあって政治にも深く関わる人物でした。最近では大人気漫画にも登場し、歴史上の人物としても知名度が高くなっています。

呂不韋像

『呂氏春秋』の七十二候

呂氏春秋は全部で二十六巻ありますが、様々な内容が記されています。当時の中国華北地方の動植物の変化や自然現象、気象などが記録されていることから当時の様子を窺い知る貴重な資料となっています。日本に伝えられた時には

そのまま翻訳されたため、日本の気候とは合わないことが多く、また意味不明の箇所も多くあったことから、江戸時代に渋川晴海（暦学者：寛永十六年～正徳五年）によって日本版への修正が行われました。七十二候は二十四節気ほど重要視されていなかったようで、日本最古の暦である『具注暦』には記載されたものの、その後は暦の解説頁で記載されるに留まっていました。現在日本に定着している七十二候は、一月～十二月まで各月毎に六つ定められています。旧正月の候は次の通りです。

〔正月節立春〕

東風凍りを解く（二月四日～八日）
◆東風が吹き始め氷を解かす

蟄虫始めて振るう（二月九日～十三日）
◆冬籠りしていた虫が動き出す

魚氷を上る（二月十四日～十八日）
◆春の兆しを感じて魚が動き出す

獺魚を祭る（二月十九日～二十三日）
◆獺が捕まえた魚を並べて食べる

鴻雁来る（二月二十四日～二十八日）
◆冬の間沼に居た雁が北へ渡る

草木萌動す（三月一日～五日）
◆草木が芽吹き始める

氷が薄くなった処を魚が突き破って飛び出す様や、獺（かわうそ）が取った魚を並べて食べる様子を“祭り”と表現していたり、各候非常に情緒豊かな表現になっています。しかしながら、その中には『呂氏春秋十二記』では示されていないものもあり、これは後の儒学者たちが編纂した『礼記・月令』に転載された時に付け加えられたものとされています。

原文の一月は次の通りですが、六番目の“草木萌動”はここには書かれていません。

『呂氏春秋　巻第一　孟春紀第一』

一日。孟春之月。日在二營室一。
昏參中。旦尾中。其日甲乙。
其帝太皞。其神句芒。其蟲麟。
其音角。律中二太蔟一。其数八。
其味酸。其臭羶。其祀戸。
祭先レ脾。東風解レ凍。蟄蟲始振。
魚上レ泳。獺祭レ魚。候雁北。
天子居二青陽左个一。乗二鸞路一。
駕二蒼龍一。載二青旂一。
衣二青衣一。服二青玉一。
食二麥與一レ羊。其器疏以達。
是月也。以二立春一。

また、江戸から明治にかけて日本向けに手を加えられている暦もあるので、候が記されている暦によっては多少の違いが見られます。

候と季語

このように七十二候からは、節気ほどではないものの、人々が季節の移ろいを大切にしていたことが伺えます。そのため、暦以外でも俳句や華道などでも七十二候の引用が見られます。

例えば“東風凍解”は東風が春の季語となっており節分の頃を示しますが、菅原道真の「東風吹かば　にほひをこせよ　梅の花　あるじなしとて　春な忘れそ」は有名です。他にも、“半夏生”は七月二日頃を示し、「半夏や　水にぬれては　白妙に」（松尾芭蕉）のように初夏に咲くハンゲショウを季語として用いています。

七十二候は鳥に関するものが最も多く二十候、自然現象が二十候、草木作物が十三候、他九候なので、鳥と自然現象は特別であったことが分かります。特に鳥は空を自由に飛べることから霊力があると考えられていたのでしょう。

その次に多い草木作物は花で、梅に始まって桃・桜・牡丹・半夏生など様々な花が登場し、華道においては季節の花として重んじられています。京都では華道の家元が“二十四節気七十二候”というテーマで華の展示会を二条城で行って大きな話題となりました。

ハンゲショウ

七月一日の候は？

もうすぐ暑い夏がやってきます。新暦七月一日の候は“蝉始めて鳴く”で、蝉が鳴き始める頃となりますが、旧暦ですと秋直前の“涼風到る”で現在の八月八日頃。現在とはかなり季節感が異なりますが、昔の人たちの暮らしに想いを馳せながら過ごしてみると、盛夏の日々も少しだけ楽しく過ごせるかもしれません。

体調に十分お気をつけ頂き、健康で無事暑い夏を乗り越えられますようお祈り申し上げます。

氷川神社行事予定（夏～秋）

夏越しの大祓

【日程】七月一日（水）十六時
【場所】氷川神社境内

夏越しの大祓式は、夏を無病息災で過ごせるように行う祓いです。形代にお名前を記して祓い料を添え、神社に納めて頂ければ、御札をお頒ちしております。形代は六月上旬より社頭でお配りしておりますので、受付までお持ちください。形代の受付の期間は、原則として大祓当日の十六時までです。

大祓式の後「茅の輪くぐり神事」を行います。

ちゃが馬七夕

【日程】八月二日（日）十七時～
【場所】氷川神社境内

月遅れの七夕を祝う催し。夕刻から夜にかけて行われ、七夕祭は夕刻より斎行します。また、お願い事を記入して頂く祈願用短冊の頒布もあります（初穂料千円）。お申し込みの方にはもれなく特製手ぬぐいを差し上げています。飲食を含め、神楽殿でのライブ、パフォーマンス等については詳細が決まり次第お知らせ致します。

例祭

【日程】
十月十七日（土）宵宮　十八時～
十月十八日（日）大祭　十四時～
【場所】氷川神社

例祭。お囃子、里神楽、境内露店他。年に一回の大祭。神楽殿で石山社中による江戸神楽が奉納され、数々の催しものが行われます。本年度の行事内容はまだ未定なので、決まり次第ＨＰ等でお知らせします。

七五三受付

氷川神社では七五三の御祈祷を受け付けております。予約は不要です。直接社務所にお出まし頂き、お申込み下さい。受付時間は左記の通りです。祈祷料につきましては、お子様お一人につき伍阡円以上でお受けしております。

※十月十八日（日）は例祭日につき、社殿での祈祷はできません

※混雑の状況により、祈祷時の付き添いとしてお祝いのお子様と一緒に昇殿する方を両親・兄弟までに制限をさせていただくことがあります

十一月は受付時間が異なります

十一月の祈祷受付は十二時の回が増えますので、一日六回、左記の時間に祈祷を行っております。開始時間前までに全員揃った後受付をして下さい。

午前中：十時・十一時・十二時
午後：一時・二時・三時

※十月・十二月は通常通りです

イベントスタッフ募集

氷川神社では「井のいち」「ちゃが馬七夕」を始め、諸行事のボランティア・スタッフを募集しております。神社にご興味がおありの方、イベント運営の経験がおありの方、伝統行事芸能や農業に関心をお持ちの方、神社社務所までご連絡願います。

氷川神社社務所
０３（３９９７）６０３２
◇ ＨＰもご覧ください

大祓い参加のススメ

大祓は、知らず知らずのうちに犯した罪穢れを祓い、災いを防ぎ病を患うことなく無事に過ごせるよう祈る神事です。

どなたでも参加できますので、神社でお配りしている大祓の袋をお持ち頂き、中に入っている人形にお名前などを記入してから袋に戻し、初穂料を添えて神社に納めてください。

記入方法は、まず袋の中から人形の紙二枚を取り出して、お名前を記入しその下に年齢（数え年）を書いて下さい。

人形は、男性用・女性用なので、それぞれ並べて名前をお書きください。書き終わりましたら袋に戻し、初穂料を一緒に納めて、社務所受付へお持ちください。その時に引き換えで大給神璽の御札をお分かちしております。

人形の書き方はこちら